



さいとう もきち
斎藤茂吉

1882年(明治15)～1953年(昭和28) 歌人、精神科医。山形県生まれ。

本名は茂吉、または茂吉、号は童馬山房主人、伊藤左千夫門下、アララギの中心人物。生涯に17冊の歌集を発表、詠んだ歌は約一万八千首に及ぶが、本人は、「歌は業余のすさび」と言っている。歌以外に『柿本人麿』全5巻など、多くの随筆や研究書、歌論、医学の研究論文などを残した。戦争中は、積極的に戦争に協力した。

1882年(明治15) 0歳、5月14日、守谷伝右衛門熊次郎の三男として、山形県上山市金瓶の農家に生まれた、母は「いく」。家は村一番の上層農家であった。

1888年(明治21) 6歳、4月、金瓶尋常小学校入学。

1890年(明治23) 4月、堀田村半郷尋常高等小学校に移る。

7月、ゴッホ自殺。

1891年(明治24) 9歳、1月、妹「なを」生まれる。

この頃より宝泉寺住職佐原隆応に習字・漢文を、

義父紀一の父、斎藤三郎右衛門に風絵を習った。

この頃から茂吉は、絵、書、作文に才能を発揮。

「成績が良く神童視された、特に習字がうまく、

食事中でも人と話してゐる間でも、

いつも指でしきりに空に文字を書いてゐた」と弟はいう。

守谷家は貧しく、小学校卒業しかできなかったため、

茂吉は、画家か寺に弟子入りするか農民になるか、と考えていたが、親戚の精神科医の斎藤紀一の、

養子候補となり上京することになった。

1892年(明治25) 10歳、4月、小学校卒業、高等科に進級。

9月、上山尋常高等小学校高等科に転校。

この頃、中林梧竹の書「イロハ帖」を臨写。

神経質で過敏症の体質の少年茂吉は、

15歳まで夜尿症が続いた。

ひよろひよろした腺病質の少年だった。

7月、日清戦争勃発

4月、高等科を首席で卒業。

8月、父と上京し、浅草の斎藤方に寄寓した。

9月、東京府開成尋常中学校に編入学。



茂吉の郷里、初夏の上山市金瓶



冬の上山市金瓶



こうだ ろはん
幸田露伴 (1867～1947)

茂吉は15歳頃、幸田露伴の『ひげ男』の付録の「靄護精舎雑筆」に感銘。その後、露伴文学に傾倒し、露伴の処世訓を指標として少年時代を送った。露伴文学は茂吉の人格形成に大きな影響をもたらした。



生母守谷いく
体格がよかった。



実父守谷熊次郎と
10歳頃の茂吉



隣家で菩提寺の宝泉寺



さわりゅうおう
佐原 隆 応

1898年(明治31) 16歳、幸田露伴の影響大。佐々木信綱編『歌の葉』を読む。この頃から歌を詠む。
1900年(明治33) 18歳、11月、養父斎藤紀一、ドイツ留学に出発。
1901年(明治34) 19歳、3月、開成中学校卒業。6月、紀一長男西洋誕生。



伊藤左千夫 (1864～1913・大正 2) 満 48 歳、脳溢血で死去。

明治 33 年、37 歳の時、年下の正岡子規に師事。

子規没後、根岸短歌会の歌人らをまとめ、偉人として敬愛する正岡子規の精神を継承した。

門下に島木赤彦、斎藤茂吉、古泉千樫、中村憲吉、土屋文明らがいる。

「アララギ」誌上では赤彦、茂吉らと激しく対立した。



『馬酔木』(第 3 巻) 茂吉の歌がはじめて掲載された号。

1906 年 (明治 39) 24 歳、**1 月、左千夫「ホトギス」に『野菊の墓』発表。**
 2 月、茂吉の歌『馬酔木』に掲載される。
 3 月、伊藤左千夫入門、「馬酔木」の一員となる。
 4 月、初めて歌会に出席し、石原純、長塚節、平福百穂らと知り合う。



青山脳病院 (帝国脳病院) 前面 敷地 4500 坪



明治 43 年頃、結婚前の斎藤輝子、16 歳頃



養父、斎藤紀一 精神科医・帝国議会議員

「口先がうまく、成り上がり者で貴族趣味の俗物」と北杜夫 (茂吉の次男) は評している。『楡家の人びと』の主人公のモデル。



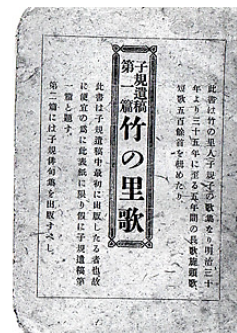
一高卒業写真 (明治 38 年 5 月)

前から 2 列目の左から 2 人目が夏目漱石、3 列目の白い服が茂吉。漱石は、明治 36 年から一高の英語講師となっていた。茂吉は一高で漱石に英語を教わった。

明治 36 年 5 月 22 日、漱石の教え子の藤村操が華厳の滝に投身自殺した。漱石は自分の責任を感じ悩んだようだが、茂吉は「死せば其迄の事なり、後は空々寂々土と化するのみ」「世は、無常迅速とかいへば未来は何だか分り申さず小生は今日では現金主義に候」などと旧友の吉田幸助に書き送っている。

茂吉は、この頃は、実世間的な功利主義、科学主義的な生き方を良しとし、藤村操の死を認めていない。「戦はずん

9 月、東京帝国大学医科大学に入学。**1 月、夏目漱石『吾輩は猫である』発表。**
 1905 年 (明治 38) 23 歳、5 月、一高卒業、7 月、斎藤紀一の次女、輝子 (11 歳) の婿養子として入籍、



正岡子規遺稿第一篇『竹の里歌』(明治 37 年 11 月)

これを読んだ茂吉は、本格的に作歌を志した。(茂吉の文学的出発となった書)

「竹の里歌よみて只一人楽しみ居り候・・・小生はじめて竹の里歌をよみ驚き申候、以来子規居士の慕はしくて堪まらず一つ小生も故人が弟子にでもならむかとまでもおもひ居りし」と親友の渡辺幸造へ手紙を書いている。(明治 38 年 4 月 30 日付)

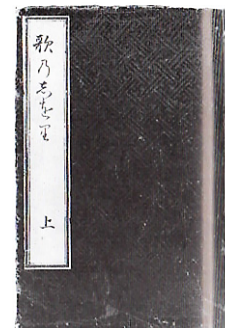
子規の影響は茂吉を写生道へと導いた。



正岡子規 (1867～1902)

1904 年 (明治 37) 22 歳、12 月、子規の遺稿『竹の里歌』を読み、作歌に志す。**日露戦争勃発**

赤坂区青山に青山脳病院を創設した。**6 月、短歌雑誌『馬酔木』創刊。**
 1902 年 (明治 35) 20 歳、一高第三部入学。**9 月 19 日、正岡子規没**
 1903 年 (明治 36) 21 歳、1 月、養父の斎藤紀一ドイツより帰国、神田和泉町に帝国脳病院を設立、8 月更に



佐佐木信綱編『歌の葉』明治 25 年 4 月、博文館

この本が、西行や源実朝に茂吉の目を開かせた。



佐佐木信綱

1872 年 (明治 5)～1963 年 (昭和 38) 歌人 三重県鈴鹿市生まれ。新体詩集『この花』刊行。歌誌『心の花』発行。短歌結社「竹柏会」を主宰。

1907年（明治40） 25歳、**3月、森鷗外、自宅で観潮楼歌会を主催。**



森鷗外(1862～1922・大正11)
満60歳没

鷗外は、「新抒情詩」「国風新興」を意図し、『アララギ』と『明星』を接近させるため、新詩社の代表与謝野鉄幹とアララギ派の代表伊藤左千夫と第三者の代表として佐々木信綱を招き、観潮楼歌会を開いた。これは26回開催された。参加者は、鷗外、左千夫、鉄幹、佐々木信綱、平野万里、与謝野晶子、吉井勇、北原白秋、石川啄木、長塚節、上田敏、木下杢太郎、平出修、古泉千樫らである。茂吉は明治42年の1月、2月、4月の3回出席している。

茂吉は、北原白秋や木下杢太郎から大きな影響を受けた。

1908年（明治41） 26歳、1月、『馬酔木』終刊。

2月、三井甲之編集『アカネ』創刊。

10月、蔵真『阿羅々木』創刊。

根岸派は二つに分裂した。

12月、『パンの会』結成される。

1909年（明治42） 27歳、1月、セザンヌの油絵、はじめて紹介される。

9月、『阿羅々木』は『アララギ』と仮名書きとなり、

東京の左千夫宅に発行所を移し、

古泉千樫、茂吉らが

順番で編集することになった。



『アララギ』

1910年（明治43） 28歳、東京帝国大学医科大学医学科卒業

4月、『白樺』創刊。『白樺』は、ルノアール、

ゴッホ、ゴーギャン、セザンヌなど印象派やロダン、マチスなどを紹介した。

6月、11月、長塚節『土』、朝日新聞に連載される。

1911年（明治44） 29歳、

東大医科大学副手となり付属病院に勤務。精神病学を研究。7月、東京府巢鴨病院勤務。「いのちのあらはれ」（「短歌小言」）10月、辛亥革命勃発（民主主義革命）

この年から大正3年まで『アララギ』の編集担当。島木赤彦を知る。

1912年（明治45／大正元年） 30歳、東大医科大学助手となる。

1月1日、アジア初の共和国、中華民国誕生

1913年（大正2） 31歳、4月、連作「おひろ」を『アララギ』に発表。

5月、母いく、脳溢血で亡くなる。（享年58歳）

7月、伊藤左千夫没（満48歳）



『赤光』表紙
明治38年から大正2年8月までの歌834首を収めている

ひた走るわが道暗ししんと堪へかねたるわが道くらし

9月、連作「死にたまふ母」を『アララギ』に発表。

10月、処女歌集『赤光』刊行、文壇内外に大反響起こり、一躍有名になる。

4月、輝子（19歳）と結婚。7月28日、第一次世界大戦勃発

1914年（大正3） 32歳、

1915年（大正4） 33歳、

1916年（大正5） 34歳、

1917年（大正6） 35歳、

12月、長崎大学医学部精神科教授となる。

1918年（大正7） 36歳、

5月、長崎に來た芥川龍之介、菊池寛と知り合う。



大正6年、輝子（22歳）茂太（2歳）茂吉（35歳）

赤き池にひとりぼっちの真裸のをんな亡者の泣きゐるところ



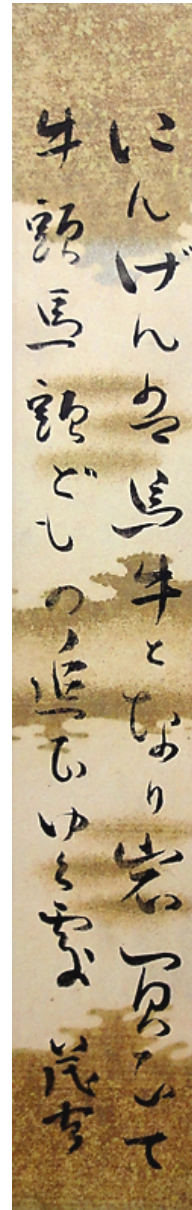
宝泉寺の「地獄極楽図」

にんげんは牛馬となり岩負ひて牛頭馬頭どもの追ひ行くところ



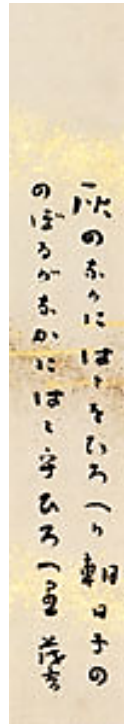
宝泉寺の「地獄極楽図」

にんげんは牛馬となり岩負ひて牛頭馬頭どもの追ひ行くところ 茂吉



茂吉筆・短冊

灰のなかに母をひろへり朝日子ののぼるがなかに母をひろへり 茂吉



茂吉筆・短冊

茂吉の生母「いく」は、大正2年5月23日、59歳で亡くなった。茂吉は母を弔うため『赤光』に、母の歳に歌の数をあわせて59首の4部連作として構成された、挽歌「死にたまふ母」を収めた。孤独で悲しい嘆きの歌である。



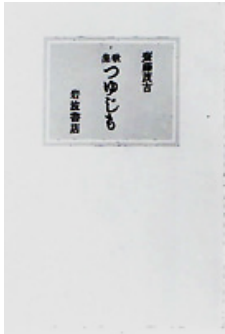
茂吉筆「歌碑」
宝泉寺裏の茂吉の母を焼いた火葬跡に建つ歌碑



茂吉筆「歌碑」
宝泉寺の茂吉の母の墓の近く・長男に建つ歌碑(2歳)茂吉(35歳)

のど赤き玄鳥ふたつ屋梁にいて足乳根の母は死にたまふなむ

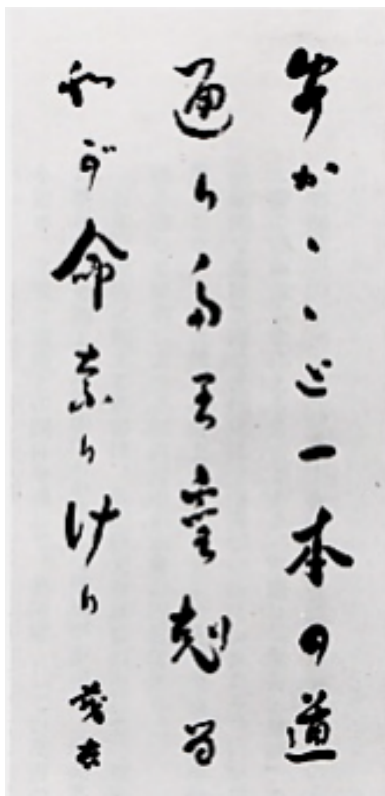
1920年(大正9) 38歳、1月、スペインかぜに罹る。「短歌における写生の説」を「アララギ」に連載。
1921年(大正10) 39歳、1月、第二歌集『あらたま』刊行。



歌集『つゆじも』昭和21年8月刊行。長崎時代(大正6年12月~大正10年3月まで)の歌を中心に収めた歌集。長崎時代は歌論、とくに写生論を多く発表している。それらがまとめられて、大正9年4月号の「アララギ」に「短歌に於ける写生の説(一)」が発表され、「実相観入」という写生論がうちたてられた。

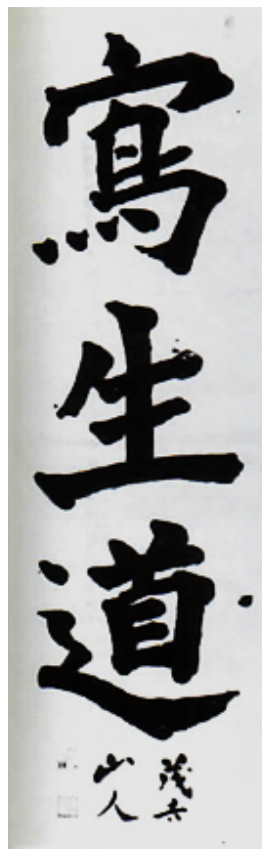
あはれあはれここは肥前の長崎か唐寺の萱にふる寒き雨

朝あけて船より鳴れる太笛のこだまはながし並みよふ山

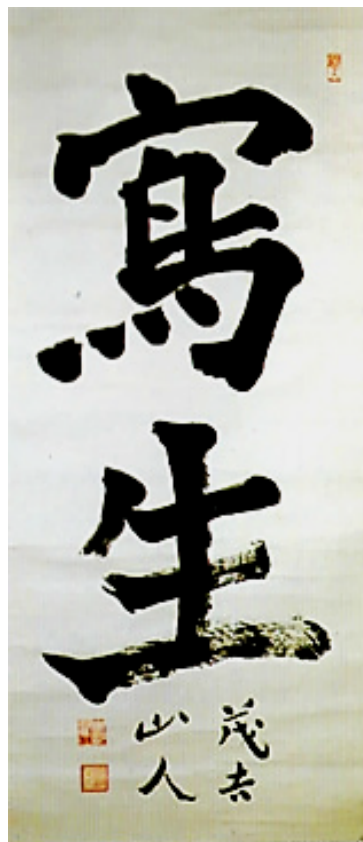


あかあかと一本の道通りたり 霊剣るわが命なりけり 茂吉

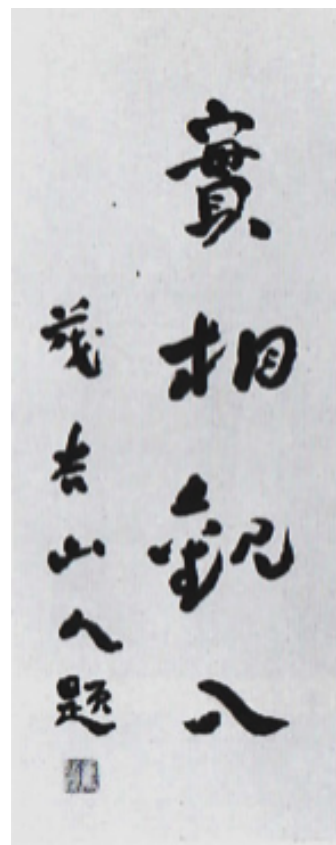
茂吉書『あらたま』巻頭6「一本道」の第1首



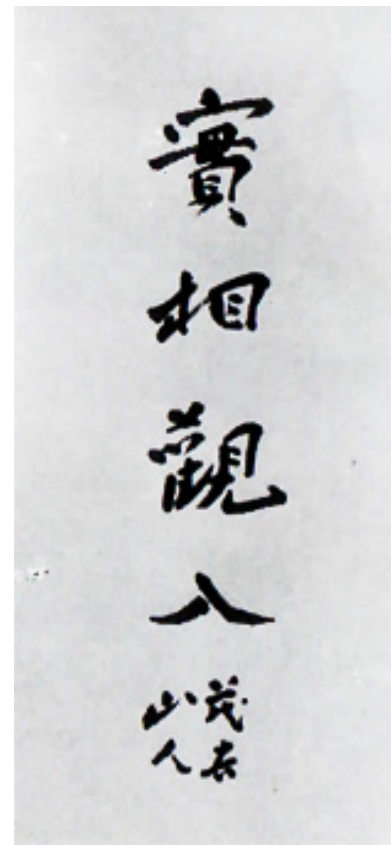
茂吉筆「写生道」



茂吉筆「写生」昭和6年(1931)



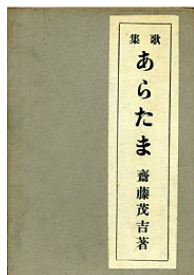
茂吉筆「実相観入・茂吉山人題」



茂吉筆「実相観入・茂吉山人」



茂吉筆 松山市の宝厳寺にある「一本道」の歌碑



『あらたま』表紙 大正2年9月から大正6年12月までの作品 746首を収めている。

芥川龍之介は、この歌をゴッホの絵のようだと讃嘆した。

短歌に於て主観的とか客観的とかいふことを気にせぬがよい。新しき実在、新しき実相に観入するとき、その短歌の声調もおのづからそれに伴ふのが順序である。

「写生」とは、「生を写す」の義、「生命直射」の義、「生」とは「いのち」の義、「写」とは「表現」の義である。短歌に於て主観的とか客観的とかいふことを気にせぬがよい。新しき実在、新しき実相に観入するとき、その短歌の声調もおのづからそれに伴ふのが順序である。

自然を写生するのは、即ち自己の生を写すのである。「写生」は手段、方法、過程ではなくて総和であり全体である。「写生」の究極は「生」の象徴となる。「写生」とは、「生を写す」の義、「生命直射」の義、「生」とは「いのち」の義、「写」とは「表現」の義である。

短歌は「生のあらはれ」でなければならぬ。まことの短歌は「自己さながら」のものでなければならぬ。自然を写生するのは、即ち自己の生を写すのである。茂吉は、徹底した観察と写生を作歌の基本とし、象徴的な自然描写によって内面を表現しようとした。短歌は「生のあらはれ」でなければならぬ。まことの短歌は「自己さながら」のものでなければならぬ。

茂吉独自の「写生説」(片野達郎氏によるまとめを参考に)「実相観入」は、茂吉が唱えた短歌の写生論で、子規の写生論を展された歌論、これは、長崎時代、スペインかぜに罹り、肺炎を併発、咯血したが、肺炎から回復後の病中、病後にまとめられた。



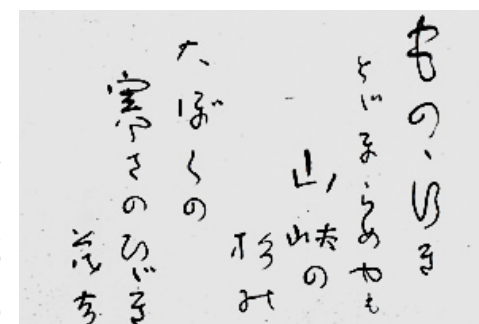
茂吉のメモ



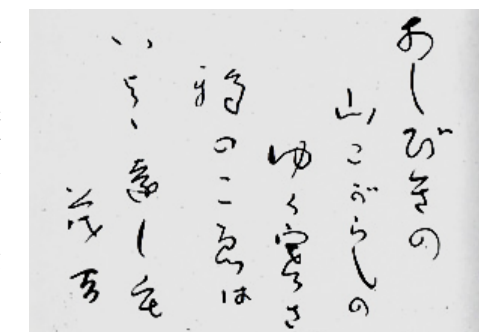
ファン・ゴッホ筆「ひまわり」1888年
ロンドン・ナショナルギャラリー蔵



ファン・ゴッホ筆「種まく人」1888年 64×80.5 cm
オッテルローのクレラー・ミュラー美術館蔵
ミレーの「種まく人」のポーズを借りた絵、
ゴッホにとって、色彩は自己の内面を表すものであった。



茂吉筆「幅」大正7年～10年頃？
歌は大正4年作
ものゝ行きとどまらめやも山峡の杉の大
ぼくの寒さのひびき 茂吉



茂吉筆「幅」大正7年～10年頃？
歌は大正4年作
あしびきの山こがらしのゆく寒さ鴉の
こゑはいよいよ遠しも 茂吉

上の図版の書は、歌が作られてから4年ほどあとに書かれたものである。それまでの書風が一変している。行間が空き、流麗でリズムカルである。寂しさが伝わってくるようだ。茂吉の歌は自己と自然が一体になったものである、書はそれを紙の上に筆と墨で再現するものである。書は歌の内容を字の形に表現するということがある。(山上次郎氏)

1921年(大正10)39歳、10月28日、精神病学研究のため欧州留学へ。12月13日、マルセイユ着、12月20日、ベルリン到着。茂吉は、留学中、医学の真摯な研究生活のあいまに、ヨーロッパ各地を旅し、寺院や美術館や病院などを見学し、視覚的、感覚的に西洋文化を摂取しようと努力した。そして、帰国後、『接吻』『ドナウ源流』など、すぐれた滞欧随筆や『遠遊』『遍歴』などの歌集を残した。

初め、茂吉は、西洋近代絵画の影響を複製の図版から受けた。茂吉と同じく、画家になったかかった芥川龍之介も、西洋文化の、言葉による理解に限界を感じ、絵画などの造形芸術によって感覚的に西洋を理解しようと考えていた。

芥川は『あらたま』の「一本道」「遊光」連作を「ゴッホの本質を深处においてとらえ文芸化した作」として絶賛した。

あかあかと一本の道とほりたりたまきはる我が命なりけり
かがやけるひとすぢの道遙けてかうかうと風は吹きゆきにけり
野のなかにかがやきて一本の道は見ゆここに命をおとしかねつも
あかあかと南瓜ころがりゐたりけりむかうの道を農夫はかへる
あかあかと土に埋まる大日のなかにひと見ゆ鎌をかつぎて

「ひまわり」のメモでは、絵をスケッチして、12輪のひまわりそれぞれに番号を打って、その一輪一輪の描法についてメモをしている。メモは2300字以上に上る。その一部を見てみよう。

(2) 心ハ黄緑ノ色デカイテアル、(1) ヨリモ薄イ色デアル、ソノマリハ黄褐ノ色デカイテソレニ丹褐色デ少シクヌテアル。ソノマリハ黄褐ノ色デ細カイ短カイ花辨ヲカイテアル。ソレガ随分表面カラモリアガッテアル。ソノマリ花辨ヲヤナガク沢山ニカイトキルガ、コレハヤゝ末ニナツタ花ノ趣デアル、(下略)

最後に、全体の印象をまとめている。

○色彩ハセンチメンタルデナク、少シモ俗向キデハナイ。床ノ黄、花瓶ノ黄等ハ一寸オモヒ及バナイ処デ後景ノ青白モ実ニ高尚ダ、○一ツツノ花ビラノ写生力ハ実ニオドロクベキモノダ。花瓶ヲ小サク、低クシテ、花ノ茎ヲ短カクシタモノ、何トモ云ヘ又重厚ノ感じヲオコサセル。明イ処トヤヽクライ処、ソノ立体的ノ関係ヲモ、花ノ心ノ色トソノマリノ明色ノ黄ハ、何カシラ迫ツテ来ルモノガアル。(後略)

この「ひまわり」の絵は、当時ミュンヘンのノイエ・ピナコテーク(近代美術館)にあったようだが、今は英国にあるらしい。



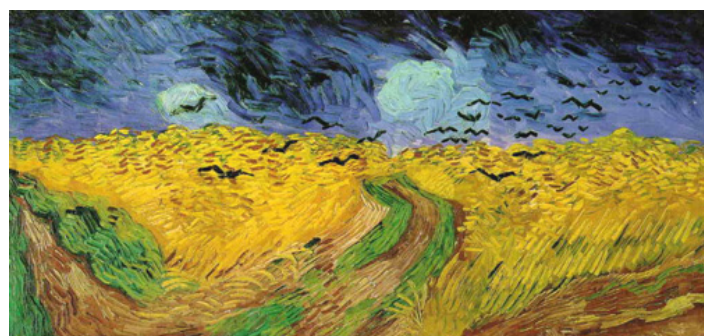
ファン・ゴッホ筆「糸杉」93.3×74 cm
1889年 メトロポリタン美術館蔵



ファン・ゴッホ筆「オーヴェール近くの平野」
1890年7月 ミュンヘンのノイエピナコテーク蔵



茂吉のメモ



ファン・ゴッホ筆「カラスのいる麦畑」1890年7月 50.5×100.5 cm
アムステルダム、ファン・ゴッホ国立美術館蔵

絶筆といわれている絵のひとつ。
「ぼくは思いきって悲しみや極度の孤独を表現してみようとした。」(1890年7月上旬の弟テオとその妻ヨー宛の手紙より)

かぜむかふ 樺太樹の白てり葉の

青きうづだちし見えて居りー茂吉『あらたま』

「僕は遠い田舎に出掛け、自然と語り合った。・・・君はあそこの景色を知ってゐるだろう、堂々とした、静かな素晴らしい樹木がある、・・・一つ一つの樹木の中に・・・劇があると言いたい・・・僕には、自然の嵐の劇と一生の悲しみの劇ほど印象の強いものはない。」(ゴッホのテオ宛の手紙から)

ミュンヘンから島木赤彦宛、大正13年4月14日付の手紙で、茂吉は「ゴッホは日本では下火に候も、小生は実際を見て、敬慕罷在候。日曜の午前に見にまゐり一昨日にて五回目に御座候。」と書いている。

日本で、雑誌『白樺』を中心に、明治末から大正初期にかけ、ゴッホブームが起こったが、大正10年代にはブームが下火になっていったようだ。茂吉も、ややゴッホ熱が冷めかけていたが、欧州に来て、ドイツやフランス、オランダなどで、初めてゴッホの本物を見、その高い芸術性を再認識し、再び、茂吉の徹底したゴッホへの探求がはじまった。

茂吉のメモに見られる、対象の部分に対するこまかい観察力、その部分を有機的に総合して全体を把握する力。これが茂吉の歌における「実相観入」の手順と同じと思われる。

茂吉の言う「写真」「写生」とは「いのちのあらはれ」のことである。ゴッホの写実は自己の心の中の世界を表現しようとしたものである。「茂吉はゴッホの絵に自分自身を再発見した」(片野達郎『斎藤茂吉のヴァン・ゴッホ』を参考)

「ゴッホは現実の自然に随順したので、その点に於ては驚くべき純粹で且つ素直な画家であつた」(茂吉『アララギ』表紙画解説より)

茂吉が大正13年11月2日、パリ郊外のオーヴェール・シュル・オワーズのゴッホの墓に詣でて詠んだ歌。

ヴァン・ゴッホの命ををはりたる狭き家に来て昼の肉食す
雨のふる丘のうへには同胞の二つの墓がならびて悲し

医師ガッセの肖像も見つランクフルトのものとの二つとあはれ
脳病みてここに起臥し境界の彼をおもへば悲しむわれは

1922年(大正11) 40歳、1月13日ウィーン着、20日、ウィーン大学神経学研究所に入る。

7月9日、森鷗外没(満60歳)

11月、論文「植物神経中枢のホルモンによる昂奮性について」

1923年(大正12) 41歳、4月、「麻痺性痴呆者の脳図」の論文が印刷され、

学位論文となる。

5月、「重量感覚知見補遺」の論文が完成。

7月、ミュンヘン大学に転学。実父死去。

9月1日、関東大震災青山脳病院も被害を受け、



大正12年(1923) ウィーンの茂吉

財政難ゆえ帰朝せよとの手紙頻繁、
平福百穂から援助を受け、滞在を延ばす。
ひろくひやくすい

11月、ヒトラーのミュンヘン一揆に遭遇



ウィーンのゲーテ像
の前の茂吉



パリの茂吉と輝子



ベルリンの茂吉と輝子



ウィーン神経学研究所で
学ぶ茂吉(右)立っている
のはマールブルク教授

1924年(大正13) 42歳、7月23日、パリで輝子と落ち合い、

共にベルギー、オランダ、ドイツ、スイス、イタリアなどを巡る。

10月、医学博士の学位を得て、11月30日、マルセーユから帰国の途に就く。

12月30日、船上で青山脳病院全焼の電報を受け取る。プロレタリア文学運動

1925年(大正14) 43歳、1月5日、神戸着、1月7日、東京着。病院の再建に奔走。2月、長女百子誕生。

3月、「普通選挙法」「治安維持法」成立。



再建された青山脳病院本院、分院は青山の
焼け跡に建てられた小病院。

青山脳病院全焼

大正13年12月29日午前零時25分、餅つきの残火の不始末から発火し、300余名の入院患者中、20名が焼死、3時20分鎮火した。ローマ式建築の大病院は一夜にして灰燼に帰した。養父紀一は政界進出などに財産を使い果たし後で、再建は後継者の茂吉の肩にかかってきた。さらにまた、火災保険が切れていたため資金の捻出に苦しむことになった。そのほか、地元民の反対運動、地主とのトラブルなど多くの障害と戦い、5月に東京府下松沢村松原に8500坪の土地を契約、再建工事を始める、茂吉は金策のため連日奔走した。大正15年4月7日、病院は再建開院した。

うつそみの吾を救ひてあはれあはれ
十万円を貸すひとなきか 茂吉

うつしみの吾がなかにあるくるしみ
は白ひげとなりてあらはるるなり
茂吉

1926年(大正15/昭和元年) 44歳、3月、島本赤彦死去(満49歳)

4月、青山脳病院復興。

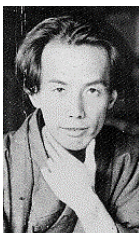
5月、再度、『アララギ』の編集発行人となる。

1927年(昭和2) 45歳、4月、青山脳病院院長になる。

5月、次男宗吉(北杜夫)誕生。

7月、芥川龍之介自殺(満35歳)(茂吉処方睡眠薬で自殺した。)

8月、古泉千樫没(満40歳)



芥川龍之介

1928年(昭和3) 46歳、11月、養父紀一死去(満67歳) 石樽茂(五島茂)との短歌論争

茂吉は、本業の精神科医、青山脳病院の婿養子として病院経営に忙殺され、研究もし、居丈高で自由奔放な妻との不和にも悩みながら、短歌や多くの随筆の制作といった文学活動によって、茂吉は生活上の危機、苦難や悲しみや嘆きをのりこえていった。第6歌集『ともしび』の後記に、歌集名「ともしび」の意味について「艱難暗澹たる生に辛うじて『ともしび』をとぼして歩くというふうな暗指でもあっただらうか。」と述べている。

焼けあとにわれは立ちたり日は暮れて

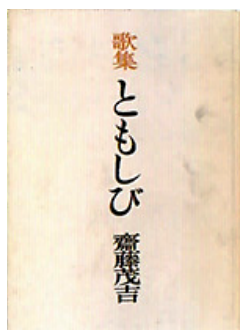
いのりも絶えし空しさのはて 茂吉(焼けあと、大正14年)

寒水に幾千といふ鯉の子の

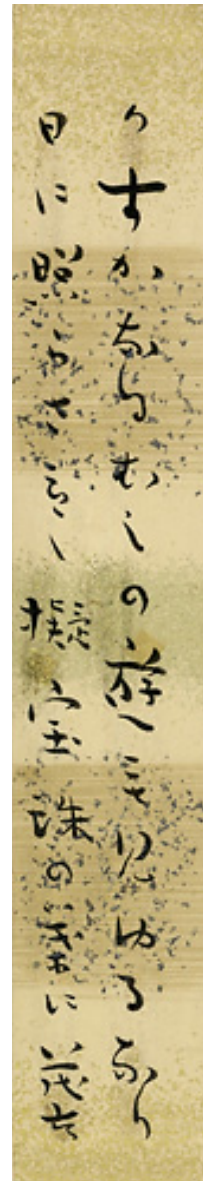
ひそむを見つつ心なごまむ (霜 昭和元年)

むなしき空にくれなぬに立ちのぼる

火炎のごとくわれ生きむとす



第6歌集『ともしび』表紙
大正14年1月(41歳)
から昭和3年(46歳)
までの歌912首を収め
ている。昭和25年1月
30日に刊行された。



茂吉筆「短冊」
6×36 cm
「ともしび」収録

1929年（昭和4）47歳、4月、『短歌写生の説』刊行

10月、次女昌子誕生。世界大恐慌

1930年（昭和5）48歳、3月、太田水穂と「病魔論争」、

土屋文明、『アララギ』の編集発行人に。

10月、満鉄の招待で満州・北支各地を旅行

1931年（昭和6）49歳、8月、窪忠和尚没 9月18日、満州事変

『正岡子規』『明治大正和歌史』執筆

1932年（昭和7）50歳、『源実朝』『近世歌人評伝』執筆

1933年（昭和8）51歳、9月、『万葉短歌声調論』を『万葉集講座』に発表。「柿本人麿研究」執筆開始。



第8歌集『連山』
表紙昭和5年10月
昭和5年11月705
から昭和5年11月
月までの歌454首
首を収めている。
昭和25年6月30日刊行。

11月、ダンスホール事件起こる。妻輝子の関係するスキヤンダルが新聞などに報じられ、茂吉と輝子は警察の取調べを受けた。

真相は明らかではないが、東京朝日新聞（昭和8年11月8日）などに、

「医博、課長夫人等々 不倫・恋のステップ 銀座ホールの不良師検挙で 有閑女群の醜行暴露」というタイトルで「・・・この不良ダンス教師をめぐる有閑女群の中には青山某病院医学博士夫人などの名もあげられ醜い数々の場面を係官の前にぶちまけてゐる・・・」などと書かれた。

11月、以後、昭和20年まで茂吉と輝子は別居することになり、事実上の夫婦でなくなった。再び同居した茂吉の最晩年、痴呆になった茂吉を献身的に介護した。

二十年つれそひたりしわが妻を忘れむとして 嚮を行くも 茂吉



茂吉（52歳）と子供たち（昭和9）
左よ 百子・茂太・茂吉・昌子・宗吉

夫婦関係は幸せではなかった。心の通わぬ夫婦であった、しばしば衝突し、かんしゃく持ちで、すぐに手を挙げる茂吉の家庭内暴力も度々であったらしい。性格の不一致などが原因と思われるが、輝子は茂吉亡きあと、「茂吉は本当に純粋な人」「茂吉は神様みたいな人だった」とテレビなどで語っているが、本心は分らない。

輝子は天真爛漫で、自由奔放、マスコミから「猛女」と呼ばれた。茂吉没後7年目、64歳の輝子は海外にはばたく。89歳で亡くなるまでに、海外渡航数97回、世界108ヶ国を訪れている。79歳で南極、80歳でエベレスト山麓、81歳でエジプト、83歳でアラビア半島、フィジー諸島、85歳でジンバブエなどを訪れ、合計で地球36周分の旅をした彼女は、類まれなる強い女性であった。（輝子の事は『猛女とよばれた淑女』斎藤由香著に詳しい）

1934年（昭和9）52歳、5月、中村憲吉没（46歳）9月、子規33回忌歌会で永井ふさ子と出会う。以後、茂

吉は毎日のようにふさ子に手紙を書いた。11月、『柿本人麿、総論篇』刊行。この頃、歌の弟子永井ふさ子（24歳）と親密な関係になる。



茂吉と永井ふさ子

永井ふさ子は、子規のふた従兄弟で、県立松山高女を卒業後上京、姉の家に寄宿し、アララギに入会し短歌の修業に励んでいた。茂吉からの手紙は150通ほどあったらしいが、一部焼却され、130通余りが残っている。ふさ子は結婚を期待したが、茂吉にはその気はない、茂吉の苦しみを慮って、叶わぬ恋を諦めるため、昭和12年春、ふさ子は両親の薦める縁談に一旦は合意するが、茂吉を忘れきれないふさ子は縁談を破約し、病気になるってしまう。この真相を知ったふさ子の父は、心労のため、翌年亡くなってしまった。縁談の破棄以後、ふさ子と茂吉はどうなったのか、「もはや私にとって他の人の感情を受け入れることは苦痛でしかなかった。婚約解消を決意すると同時に、先生との恋愛をつづけることも自分にゆるせなかった」と、いうことらしい。

ふさ子は83歳で亡くなるまで、独身を通した。松山の長建寺にふさ子の一人墓がある。茂吉没後10年の1963年、ふさ子は雑誌に茂吉からの手紙と手記を発表し、衝撃が広がった。

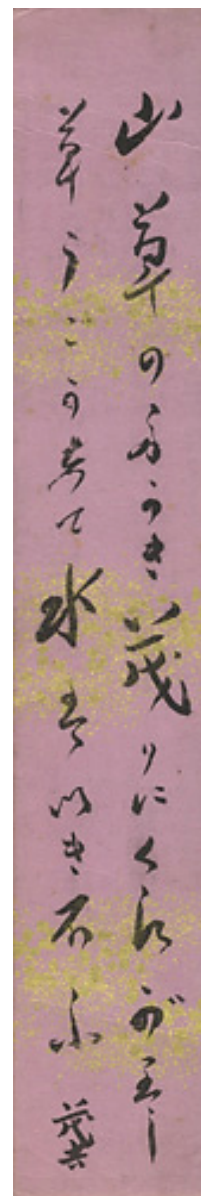
1981年刊、永井ふさ子著『斎藤茂吉・愛の手紙によせて』がある。



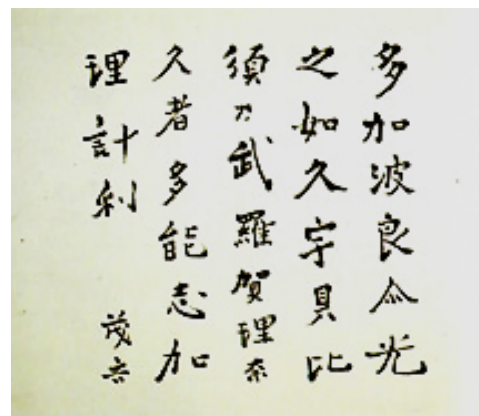
20代の永井ふさ子

光放つ神に守られもろともにあはれひとつの息を息づく (茂吉とふさ子の合作)
 狼になりてねたましき咽笛を噛み切らむとき心和まむ (茂吉とふさ子の合作)

山草のたかき茂りにくらがりし草つこかして水はいきほふ 茂吉



茂吉筆「短冊」
「たかはら」所収



茂吉筆「^{たかはら}高原に光のごとく ^{うけひす}鶯のむらが
り鳴くはたのしかりけり 茂吉」
歌集「たかはら」所収

昭和8年から14年にかけて作られた、「白桃」「暁紅」「寒雲」は茂吉文学の頂点と言われている。茂吉52歳から58歳までの三千余首である。これらが作られた時期は、友の死や妻のスキヤンダルなど実生活上の悲嘆がつづいた。そのような孤独のなかで、歌の弟子永井ふさ子に出会い、暫時、茂吉は恋愛歌人へと転進したようだが、彼は女体にか興味がなかったようである。これでは恋愛歌人とはいえないだろう。



第10歌集『白桃』表紙
昭和8年から昭和9年までの歌 1017首を収めている。昭和17年2月25日刊行。



第11歌集『暁紅』表紙
昭和10年から昭和11年までの歌 968首を収めている。昭和15年6月30日刊行。



第12歌集『寒雲』表紙
昭和12年から昭和14年10月までの歌 1115首を収めている。昭和15年3月1日刊行。



第13歌集『のぼり路』
表紙昭和14年10月から昭和15年までの歌 734首を収めている。昭和18年11月20日刊行。

1935年(昭和10) 53歳、「童馬山房夜話」を「アララギ」に連載開始、

10月、『柿本人麿、鴨山考補註篇』刊行。

1936年(昭和11) 54歳、人麿歌集の評釈に専念する。

1937年(昭和12) 55歳、2月、郷里の宝泉寺境内に墓を造営し、

「茂吉之墓」の文字を揮毫。

5月、『柿本人麿、評釈篇卷之上』刊行。

茂吉、松山で、永井ふさ子の両親に会い、

ふさ子の婚約を祝う。ふさ子の両親は、

二人の関係を知らず、茂吉を大歓迎する。

ふさ子の案内で正岡子規の遺跡をめぐる。

6月、帝国芸術院会員となる。

7月7日、日中戦争勃発(盧溝橋事件)

1938年(昭和13) 56歳、4月、国家総動員法制定される。

11月、『万葉秀歌』上下二巻を刊行。『柿本人麿』により透谷賞受賞。

この頃より、戦争詠が多くなってくる。ふさ子との恋愛も冷めてくる。茂吉の関心は、恋愛から国家や戦争へと変化し、恋愛歌人から、愛国歌人へと転身していった。ふさ子は生涯茂吉を慕い続けたのであろうか。歌集『寒雲』のなかで戦争歌人への転身が見られる。愛国心にもえた戦争歌を、歌集に編むことを茂吉は予定していたが、戦争が終わってしまい実現しなかった。茂吉は歌壇の先頭に立って戦争を賛美した。

1939年(昭和14) 57歳、2月、『柿本人麿、評釈篇之下』刊行。

9月、第二次世界大戦勃発。10月、高千穂峰に登る。

1940年(昭和15) 58歳、3月、歌集『寒雲』刊行。『不断経』刊行。

5月、茂吉の『柿本人麿』帝国学士院賞受賞。

6月、『高千穂峰』刊行。歌集『暁紅』刊行。



茂吉は、人麿の歌を既成短歌の最高峰だと仰ぎ、人麿研究に没頭した。昭和9年から15年にかけて『柿本人麿』全5巻が岩波書店から刊行された。長谷川如是閑は「御用詩人柿本人麿」で人麿を徹底的に貶めた。



「愛国百人一首」昭和17年12月8日、大東亜戦争開始一周年に発行

認定 情報局、選定 日本文学報国会、協力 毎日新聞社、後援 陸軍省、海軍省、文部省、大政翼賛会、日本放送協会、京都 山内任天堂謹製

愛国百人一首選定委員は、佐々木信綱、尾上柴舟、太田水穂、窪田空穂、斎藤瀏、**斎藤茂吉**、川田順、吉植庄亮、釈迢空、土屋文明、松村英一。(北原白秋)

万葉時代から幕末までの、皇室への崇敬や国土愛、家族愛などを詠んだ「愛国」の和歌が選ばれている。選ばれた歌は、名歌ばかりで、本来、軍国主義とは何ら関係ない歌であった。しかし、これらの和歌はナショナリズムと結びつけられ、侵略戦争を聖戦と思わせるなど、戦争する心を準備した。

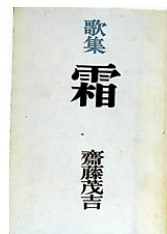
茂吉は、戦後、「戦犯歌人」と蔑称され、非難が集中するほど国策に超協力的な歌人であった。彼は歌作を通して、戦争遂行に積極的に加担した。彼が戦時中に制作した戦争礼賛、国威発揚歌は1800首以上に及び、そのほとんどが新聞や雑誌やラジオで発表され、軍国主義を煽るのに役立った。しかし、茂吉本人は、戦争協力したことへの反省はないようである。茂吉は、昭和21年4月、弟子に以下のように話したという、「俺を戦争協力者とは一体どういうことだ。俺ばかりということはない。歌人のほとんどが皆そうじゃないか。国が戦争をすれば、誰でも勝たせたいと願うのは当然だ。國民にとってそれがどこが悪い」「俺を戦争協力者に擧げるなんて、奴らは共産党か時局便乗の奴らに決まっている」と。

茂吉の戦争歌は、歌集「石泉」「白桃」「曉紅」「寒雲」「のぼり路」「霜」「小園」と「短歌拾遺」などに収められている。そのいくつかを見てみよう。

あな清し敵前渡河の写真みれば皆死を決して噴鼻揮ひとつ (「寒雲」)
りて今夜ねむれず (「寒雲」) 勝ちきほあたらしき代のときのまも皇御民はおほらかにせじ (「とどろき」)

あたらしき年のはじめに誓はなむこの勝戦つらぬかむとぞ (「くろがね」) あやまれる蒋介石の面前に武漢おちて平和建立第一歩 漢口は陥りにけり穢れたる罪のほろぶる砲の火のなか・・・。

茂吉はまた、「たたかひの歌をつくりて疲れたるわれの一時何か空しき」(「独語」)とか、戦争歌を「死骸の如き歌累々」とよこたはるいたしかたなく作れるものぞ」などと時に読んでいるようだが、何か嘘らしく卑怯である。



第14歌集『霜』
昭和16年から昭和17年までの戦争に関係のない歌863首を収めている。昭和26年12月20日刊行

1941年(昭和16) 59歳、12月8日、真珠湾攻撃、太平洋戦争開始。
1942年(昭和17) 60歳、2月、歌集『白桃』刊行。
3月、「文学の師・医学の師」を発表。
8月、『伊藤左千夫』刊行。
1943年(昭和18) 61歳、11月、『源実朝』、『のぼり路』刊行。
1945年(昭和20) 63歳、3月、12年間別居していた妻輝子を青山の自宅に帰す。
4月、単身、郷里金瓶に疎開する。
5月25日、空襲で青山自宅、病院が全焼。
6月、妻輝子、次女昌子、金瓶に来て同居。

8月、広島、長崎に原爆投下される。

第二次世界大戦終結



第16歌集『白き山』
昭和21年から昭和22年までの歌850首を収める。昭和24年8月20日刊行。



昭和21年頃、大石田を流れる最上川の河原の茂吉

1946年(昭和21) 64歳、1月30日、山形県大石田に移住。
輝子は上京して長男茂太と同居。
3月、左湿性肋膜炎に罹り
5月上旬まで臥床療養。
4月、選集『浅流』刊行。8月、歌集『つゆじも』刊行。
10月、昭和22年度御歌会始選者となる。
4月、『短歌一家言』『作歌実語鈔』

『万葉の歌境』刊行。

7月、『童牛漫語』刊行。

8月、歌集『遠遊』刊行。上山で天皇に拝謁。

11月、東京の世田谷区代田^{だいだ}に移住。

この年から1951年まで歌会始選者

1948年（昭和23）66歳、1月、養母ひさ死去。朝日新聞歌壇の選者に。

4月、歌集『遍歴』刊行。

青山脳病院院長を引退。

1949年（昭和24）67歳、4月、歌集『小園』刊行。

5月、日本芸術院会員となり宮中で倍食。

8月、歌集『白き山』刊行。

1950年（昭和25）68歳、1月、歌集『ともしび』刊行。

5月、第一回読売文学賞詩歌賞受賞。

6月、歌集『たかはら』刊行。

10月、『明治大正短歌史』刊行。

次兄守谷富太郎死去。左側不全麻痺で臥床。

11月、歌集『連山』刊行。新宿区大京町^{だいきやうちょう}に移住。

1951年（昭和26）69歳、2月、心臓喘息の発作と呼吸困難続く。

3月、『続明治大正短歌史』刊行。

6月、歌集『石泉』刊行。

11月3日、文化勲章受章。

12月、歌集『霜』刊行。

1952年（昭和27）70歳、5月、『斎藤茂吉全集』（岩波書店）第一回配本開始。

痴呆が進む。

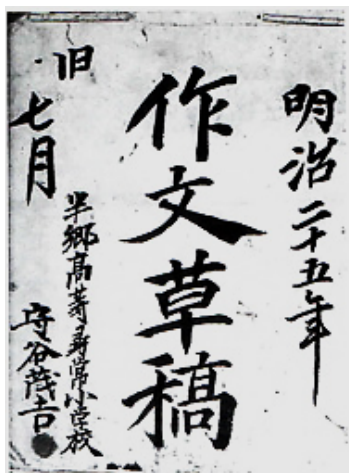
1953年（昭和28）71歳、2月25日、心臓喘息で死去。（満70歳9月）

茂吉の書画

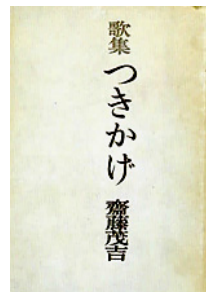
茂吉の実父も兄弟たちも能筆ぞろいであった、中でも茂吉は、幼少の頃から書が特に上手く、父は茂吉に本気で、勉強して書家にならないかと勧めたくらいであったという。茂吉は、9歳頃から、佐原隆応和尚について書を学んだ。隆応和尚は、若いころ（明治初年）、流行していた巻菱湖流を学び、ついで、鳴鶴流に移った。茂吉も鳴鶴流の手本を小学校で習った、隆応和尚は、26歳の時（明治21年）、たまたま中林梧竹の拓本を見た。その後、和尚は生涯、梧竹の崇拜者となり、梧竹の書法を村中に広めた。明治25年、梧竹が宝泉寺に来て、七日間滞在した折、和尚の依頼で梧竹は「片仮名帳」を書き残した。それを10歳の茂吉が双鉤填墨した、と後年、本人が言っているものが残っているが、おそらく長兄が写したもののだろう。



梧竹の習字手本を茂吉の長兄が写して茂吉に与えた手本と思われる。梧竹は鳴鶴の書を臨書したようである。



茂吉筆「作文草稿」表紙 10歳の書



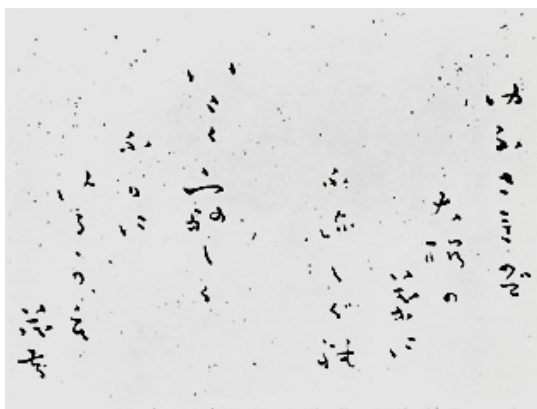
第17歌集『つきかげ』昭和23年から昭和27年までの歌1008首を収める。茂吉没後の昭和29年2月25日刊行された。



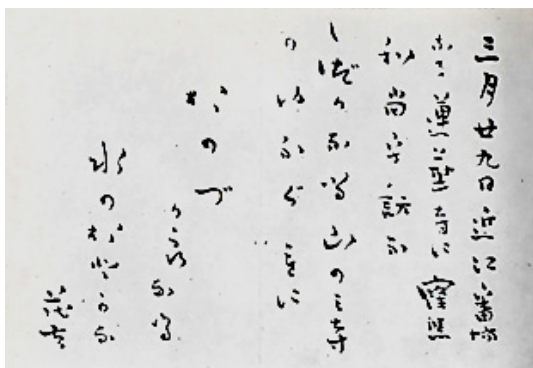
昭和26年頃の茂吉



昭和25年、孫と茂吉

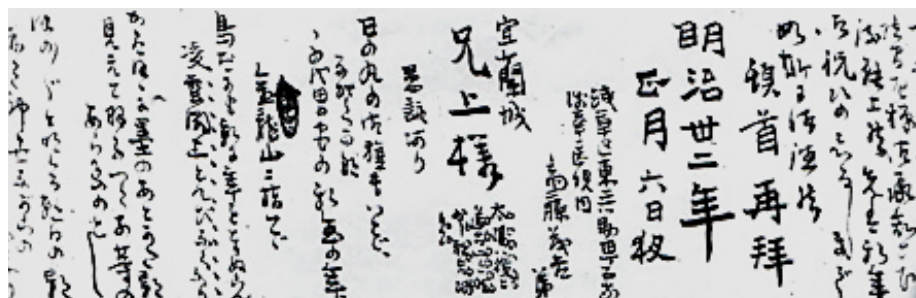


茂吉筆「帖」大正10年（39歳）頃、
ゆふされば大根の葉にふるしぐれいたく寂しく
ふりにけるかも 茂吉



茂吉筆「帖」大正10年（39歳）頃
「三月廿九日近江番場なる蓮花寺に隆応和尚
平訪ふ」しづかなる山のミ寺のゆふぐ連に於の
づか良なる水の於とか奈 茂吉

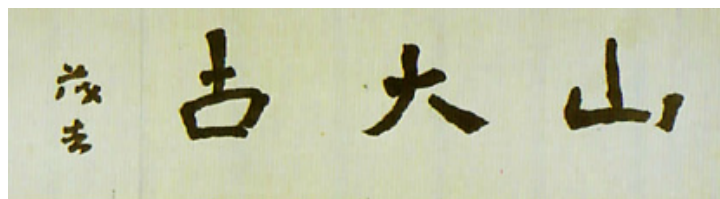
茂吉は、大正10年、長崎を引き上げる途中
近江にいた隆応和尚を訪ねた。その時詠んだ歌
と書である。寂寥幽玄の風韻の書である。



茂吉筆「次兄守谷富太郎宛書簡」1899年（明治32年1月6日付）16歳の書 歌がかかっている。



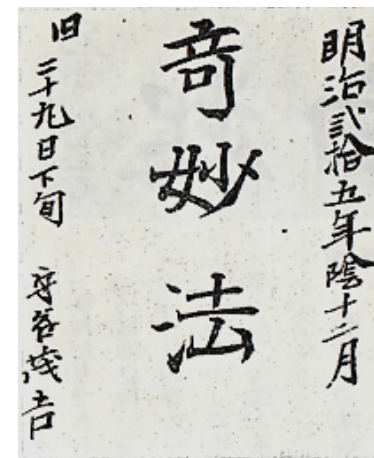
中林梧竹筆「恬筆以前」1912年（明治45年/大正元年）86歳 超短鋒筆使用
「恬」とは筆を改良した秦の蒙恬（前3世紀の人）のこと、蒙恬より昔の筆だという意味。



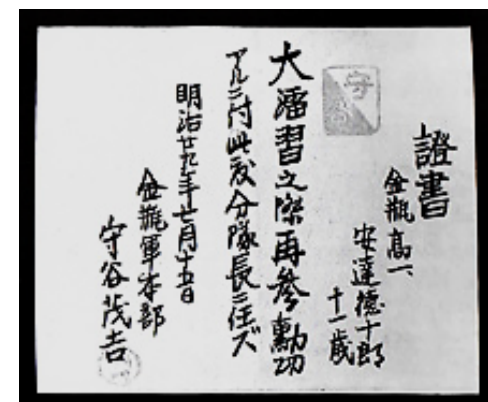
茂吉筆「山太古」扁額 大正5年11月、34歳 福島県の友人宅で書かれた。
明治25年ころ、梧竹が隆応和尚を訪ね、金瓶にきた時、茂吉の父
守谷熊次郎が隆応和尚を通じて、梧竹に「山太古」の揮毫を依頼し
た。それで、茂吉は10歳の頃から実家にあった梧竹の「山太古」の
扁額を鑑賞し、感動もしていたようである。その実家の作品を思い
出してこれを書いたと思われる。梧竹崇拜のあらわれ（山上次郎氏）
茂吉は小学校で習った鳴鶴の手本や中学校で習った西川春洞の影響
も受けているようである。



梧竹晩年の愛用筆
大と小（超短鋒筆）



茂吉筆「奇妙法」10歳の書
六朝体で書かれている



茂吉筆「証書」冗談で書いたもの 14歳の書

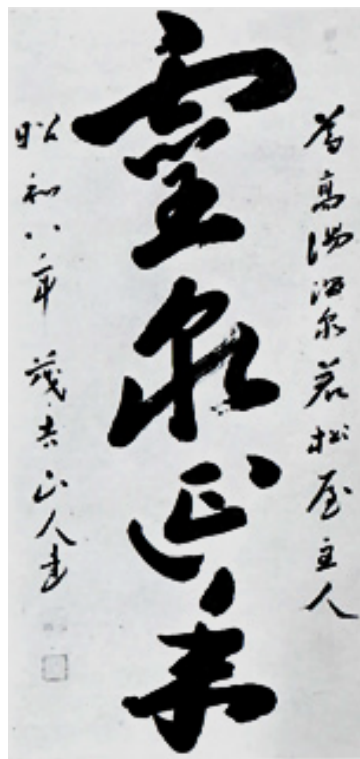
少年茂吉の書の師は、
隆応和尚と梧竹の書であ
った。彼等から北派の書
を習った。梧竹は60歳前
後に六朝風の書をかいて
いた。梧竹が金瓶にきた
のは65歳ころである。
和尚は「字は形などは
どうだつてよい、きたな
い字を書いてよい。た
だ芯のある字を書けと
いうことは、子供にもな
んとなく会得出来たナ。」
（茂吉秘話）



茂吉筆「蔵王山歌碑」幅
昭和9年（1934）8月52歳

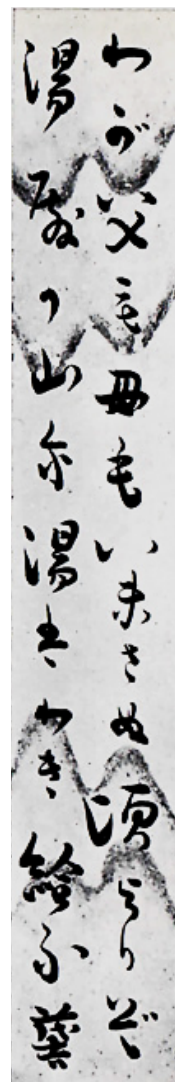
茂吉の書にはめずらしく、右上がりの強い書である。逆境に抵抗する気持ちが表れたものか。書かないではいられないから書いた書である。そこが、書家梧竹との違いである。

陸奥をふたわけざまに／簞えたまふ蔵王の山／の雲の中にたつ 茂吉



茂吉筆「霊泉延年」幅 昭和8年（1933）
山形市外蔵王温泉の若松屋蔵

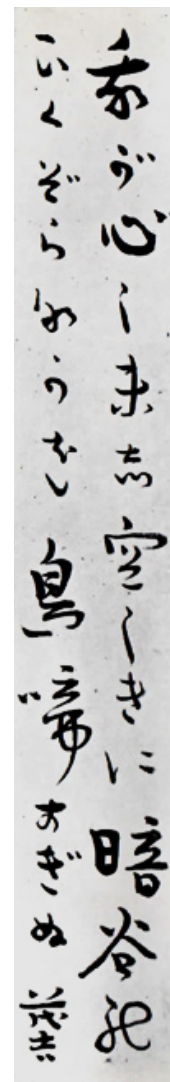
茂吉がとくに、中林梧竹に傾倒したのは昭和4、5年ころからという。東京の烏山にある梧竹堂から、名品を借り受けて学んでいる。梧竹の「恬筆以前」を借りて臨書したのは昭和8年（1933）、茂吉51歳の時という。臨書した日に、上の「霊泉延年」を揮毫したようである。梧竹にそっくりである。この頃から茂吉の書は梧竹風になってゆく。左右の細字は梧竹風ではない。



茂吉筆「短冊」
昭和6年頃

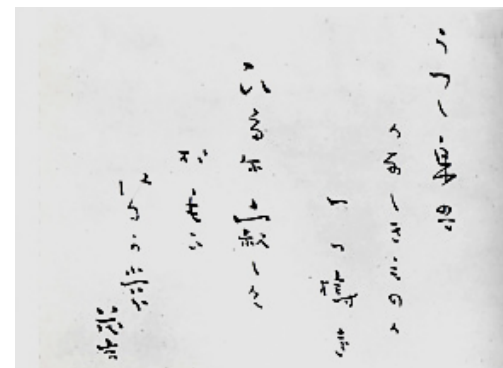
起筆の大きい書風は昭和4年頃に消滅し、続いて、梧竹の連綿草の影響を受けた書が現れるが、昭和5年から昭和9年にかけて一字一字を切り離した書風に変わっていった。

わが父も母もいまさぬ頃よりぞ湯殿の山に湯はわき給ふ 茂吉

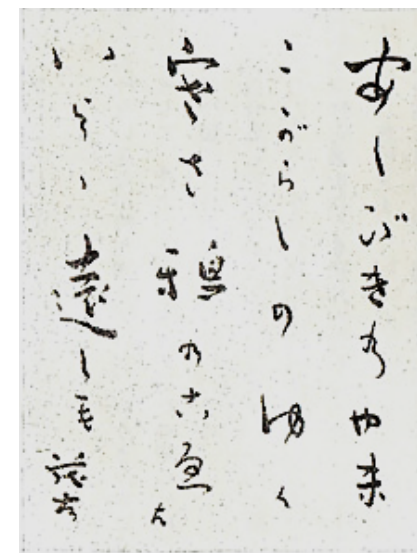


茂吉筆「短冊」
昭和6年頃

我が心しまし空しきに暗谷のひくぞらなかを鳥啼すぎぬ 茂吉

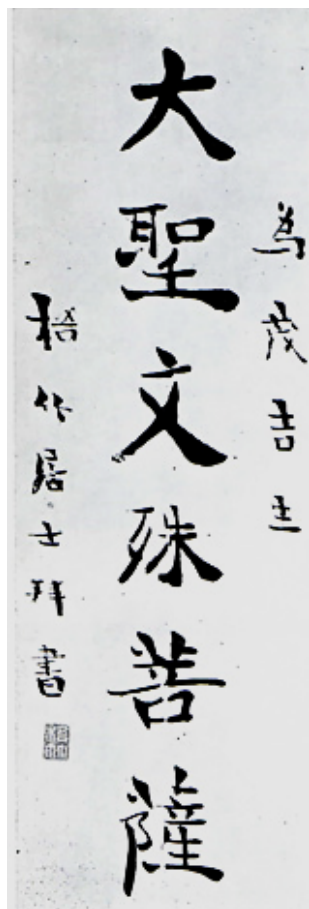


茂吉筆「幅」大正14年（43歳）頃の書
うつし身はかなしきものか一つ樹をひたに
寂しくおもひけるかも 茂吉



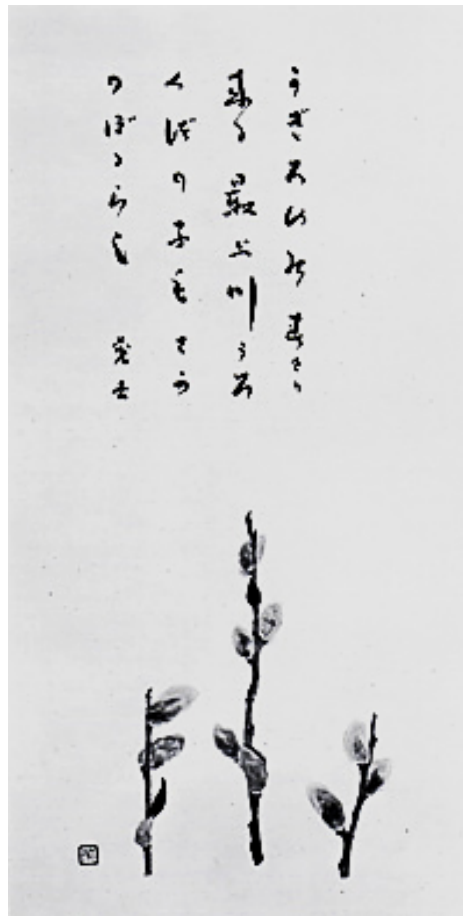
茂吉筆 大正14年（43歳）頃の書
あしびきのやまこがらしのゆく寒さ鴉のこ
ゑはいよいよ遠しも 茂吉

起筆が大きく深く入筆される書は、大正末期から昭和初期にかけてだけみられる特徴である。これは誰の影響もない、茂吉独自の書である。この頃、茂吉は「空間の筆意」について意識している。



中林梧竹筆「幅」明治29年9月

隆応和尚が梧竹に依頼して、上京した茂吉のために揮毫してもらった書。茂吉は、死の7日前に、この書を床の間に掛けてもらって、ながめながら亡くなったという。「大聖文殊菩薩中林梧竹拝書少年茂吉十五歳のため」(昭和26年、茂吉作)



茂吉筆「猫柳」昭和22年ころか？

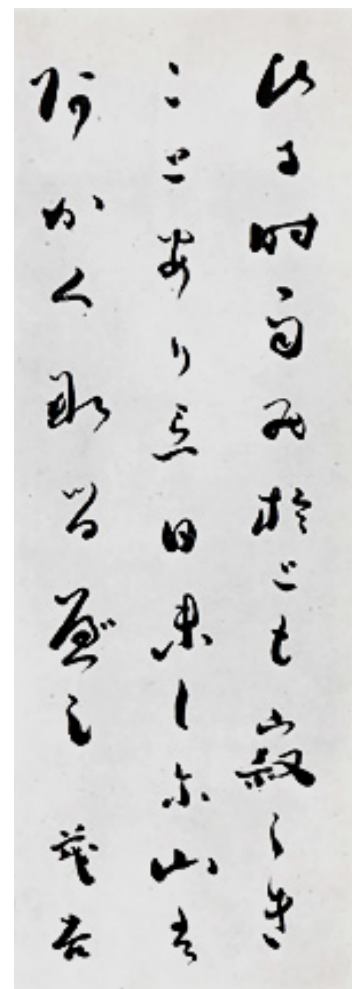
正岡子規の絵と共通するものがある。茂吉の歌と同じく、観察が細かく、感情が込められている。『斎藤茂吉全画集』(中央公論美術出版)には85枚の絵が収められている。茂吉は、風景の絵も描いているが、この画集は、花や野菜の絵を載せている。



茂吉筆「南瓜」昭和21年10月頃？

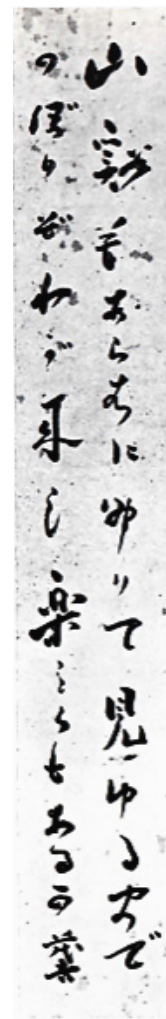
茂吉は、敗戦の年から翌年にかけて大石田町に住み、本格的に絵を描き始めた。茂吉の絵は、誰の真似でもなく、自然に向かいあって一人で描きあげたものである。

たまきはる命生きむとはしきやしの畑つものも食はなごめやも 茂吉



茂吉筆 昭和20年10月28日の書

終戦後の茂吉の書、ねちねちとゆっくり書いている、敗戦の無気力なのか、何かを噛みしめているようである。



茂吉筆「短冊」昭和10年～15年頃も書

書きぶりががたどたどしい。後退る。梧竹を忘れたためか。

山谿もあらはになりて見ゆるまでのぼりぞわが来し楽しくもあるか 茂吉

ひる時雨のおとも寂しきとありて日ましに山はあかくなるべし 茂吉